

リラ・キャボット・ペリー
(Lilla Cabot Perry 1848-1933)

明治の日本を描いた印象派の画家

大野順子ロスウェル

リラは今から100年前、1898年(明治31年)に日本へやってきて3年間東京に住み、油絵やパステル画を描いた。おそらく当時ただ一人日本に滞在していたアメリカ人女性画家であり、初めて印象派の目で日本を描いた人だったと思われる。

リラは1848年1月13日にボストンの名家キャボット家に生まれた。「ラージ家の人はキャボット家の人とだけ口をきき、キャボット家の人は神とだけ口をきく」と言われたほどのエリート階級の家柄だった。外科医の父の8人の子供の長女として小さい頃から「簡素な生活、崇高な思考、他人への奉仕」を教えられた。家には作家たちも集い、哲学者ラルフ・ワルド・エマーソンや若草物語の作者ルイザ・メイ・オルコットなどと子供たちはかくれんぼなどして遊んだ。

リラは優れた生徒だった。絵だけではなく、文学に秀で、特に詩と音楽が得意だった。きちんとした美術教育は受けなかったが、家にはいつも画家や美術コレクターが出入りし美術に囲まれた環境のなかで育った。特にミレーのコレクションで知られるクインシィ・ショウは親しい友人で家に行って絵画を見せてもらった。

リラが13歳になった年、南北戦争が始まった。キャボット家は病人や負傷した人たちを助け、逃げてきた黒人奴隷を受け入れた。戦争はリラの17歳のとき終わった。

1868年、20歳の時、リラは友達からトーマス・サージェント・ペリーを紹介される。トーマスはベンジャミン・フランクリンの直系の子孫で彼の大叔父は日本の開国を促した黒船で知られるペリー総督だった。トーマスはその二年前にハーバード大学を卒業しヨーロッパを周り、秋からハーバードで文学を教えるため戻ってきたばかりだった。それから6年してリラとトーマスは結婚した。

ボストンの名家同士の結婚だったが、経済的にはそう楽ではなかった。トーマスの教師としての仕事は突然なくなり、その後批評家として論文や作品を発表、文学論など編集したりしたが批評家たちには認められても一般の人々には無視された。結婚後11年して、リラの父が亡くなり、遺産を相続してやっと暮らしむきはよくなった。その間に3人の娘が生まれた。1876年に長女マーガレット、1880年に二女エディス、1884年に三女アリスである。しかし年がたつにつれ遺産は減っていき、リラの肖像画からの収入を当てにするようになってきた。



リラは独学で絵を描いていたが、1884年、36歳になって肖像画家のアルフレッド・コリンズから手ほどきをうける。コリンズは今日忘れられているがフランスで学んだ有名な画家で弟子には、トーマス・エイキンやジョン・シンガー・サージェントなどがいる。翌年リラは美術館のロバート・ボノーに師事する。

二人の幼女と一歳の赤ん坊もいる中でやっと絵をならい始めたリラは夢中だった。その頃のリラの手紙が残っている。「絵を一生懸命描いています。絵が上達していると感じられるし、その感じがとても素晴らしいのです！先日トム（夫）にもし私が学校に行っていた少女時代以来これほど幸せだったことはないと言っても怒らないでね、と言いました！」

師ボノーは元々フランスで学んだ画家だったが、翌年再びフランスに旅し野外の写生に関心をよせていく。リラは彼と生涯交流を続け、どちらもアメリカの印象派をすすめ風景画と肖像画を制作した。

そのころの19世紀のアメリカの芸術家はパリに目を向け、集まっていた。画家だけでなく、作家もパリを中心に活躍していた。トーマスは1886年一家を率いて2年間パリに移る決意をする。リラは手紙の中でこう言っている。「近代の絵画の本拠地であるパリにすみ、そこで絵の勉強を始めるというのなかなかいいでしょう。」

パリ行きの準備のためリラはすぐにキャウルズ美術学校に入学する。そこで教授のデニス・バンカーに会い、彼の絵に引きつけられたリラは手紙にこう書いた。

「バンカーは若い画家で驚くべき素描の力があります。絵を習うプロセスは難しいからこそ それをととても楽しんでます。全身像は頭部だけに比べてなんと複雑なんでしょう。それに私は木炭の経験あまり無いし、絵の具よりもっと難しいということが分かりました。」

リラがボストンで教えを受けた画家たち、コリンズ、ボノー、バンカーはパリのアカデミア ジュリアンで学んでおり、力強い作風の肖像画家だった。

フランス滞在

1887年、ペリー一家はボストンを出発し、ロンドンやスペインをまわりながら、冬にはパリに落ち着いた。リラはアカデミア コラロッシュ美術学校に入学するがあまり出席せずルーブル美術館で古典名画を勉強した。翌年ミュンヘンに旅行、帰ってからアカデミア ジュリアンに入る。次の年サロンにトーマスの肖像画と読書している娘エディスの絵を出品し、両方とも入選してやっとリラは画家として認められた。41歳になっていた。

その夏ペリー一家はジベルニィで過ごすことにした。そこには印象派のモネが住んでおり、彼を取り巻くアメリカ人の画家たちのグループがいた。テオドラ・ロビンソン、ジョン・ブレック、テオドラ・バトラーなどである。すっかりジベルニィに魅せられたペリー一家は1889年から1909年までの間に9回、夏をここで過ごすことになる。リラはモネの画風にひかれ、彼の唱える野外での光の中での写生に共鳴する。点描を取り入れ、紫や緑の色を使い、またより自由な筆使いで村の風景や人物を描き、多くの優れた作品がここで生み出された。

1889年いったんボストンへ帰るが、1891年再びフランスへ戻ってきた。その年またボストンに帰り、1994年フランスにもどる。この夏からペリー一家はジベルニィでモネの隣の家を借りることになった。モネはよくふらりと立ち寄り、時にはリラの絵の批評もした。昼食後寄っては庭で一服しました午後の仕事に戻っていった。

このころリラはピサロとも親しくなった。パリでお茶会をひらきアメリカ人のコレクターたちにピサロの絵をみてもらったりもした。

1897年ペリー一家はボストンに戻り、リラはセント・ボトルフ クラブで個展を開いた。これはリラにとって画期的なことだった。批評家はリラのジベルニイの風景画にはふれず、肖像画を賞賛した。

フランスとボストンを行き来している数年間、リラは仲間の画家たちのためにも骨をおった。モネの絵をボストンに紹介し、展覧会も開いた。ジベルニイにいるアメリカ人画家のためボストンでの個展を開けるよう世話をし、美術学校の教職をみつけてあげたりした。

日本滞在 1898年(明治31年)ー1901年(明治34年)

1898年ペリー一家は日本へ向けてボストンから出発した。トーマスが慶応義塾大学の英文学の教授となったためである。リラは50歳、娘たちは、マーガレット22歳、エディス18歳、アリス14歳になっていた。ヨーロッパで経験を積んだ後での3年間の日本滞在はリラに新しい芸術の目を開かせた。版画や日本画、とくに歌麻呂、北斎、広重の浮世絵はすでにジャポニズムとしてフランスの印象派やアメリカのウィスラー、ラファージに影響を与えていたが、日本にきて版画や日本画の線の美しさ芸術性にあらためて感銘を受けた。

しかし、明治31年当時の日本の美術界の内情は トーマスの大叔父、ペリー総督の黒船による開国以来、伝統美術はかえりみられず 西洋美術一辺倒だった。この日本文化の破壊の危機に立ち向かったのがボストン美術館からきたフェノロッサと岡倉天心だった。明治11年に来朝したフェノロッサは日本の古画のすばらしさを説き、彼を中心に岡倉天心、橋本雅邦、狩野芳崖らが集まり日本の伝統会画を生かした新しい日本画の創作を目指した。明治23年天心は美術学校の校長になったが31年教師間の紛争のため退いた。そして同年岡倉天心は大観、観山、春草ら39人の画家と日本美術院を創立した。

一方、明治の洋画は高橋由一、浅井忠らによって始められ、暗褐色のヤニを溶かしたような画面からヤニ派と呼ばれていた。明治26年、フランスでコランから学んだ黒田清輝が帰国し、外光派の新風をもたらした。これはムラサキ派と呼ばれた。明治29年東京美術学校に初めて西洋画科が作られ、黒田はその主任教授となった。その2年後リラは日本にやってきたのだが、印象派はまだ日本では知られていなかった。若い作家や画家がフランス印象派を携えて次々と帰国し日本に広めるのは、明治40年代になってからである。

リラはすでに11年前(明治20年)の夏、文部省の美術取調委員として欧米に出張していた岡倉天心とフェノロッサにロンドンで会っている。リラの義兄ラファージと岡倉天心は友人だった。ラファージはアメリカでは有名な画家で リラの夫、トーマスの姉のマーガレットと結婚していた。ラファージは1886年(明治19年)来日しその時、まだ若かった岡倉天心の世話になった。そのときの旅のことは“An Artist's Letters from Japan” (画家東遊録) にまとめられている。リラは岡倉天心とフェノロッサと連れ立ってロンドンのナショナル ギャラリーを見て回った。リラと岡倉は古典名画、特にレンブラントの素晴らしさにおいて話が合った。フェノロッサは トーマスに言わせれば、西洋のものは何でも下等だとみなす「狂信者」であり、私生活もスキャンダルに満ちていてリラは好感を持てなかった。

日本についたその年、リラは岡倉の助けを得て東京で個展を開いた。さらに日本美術院の名誉会員にもなった。

リラは女中のツネを伴ってたびたび写生にでかけた。たまに一人か二人娘たちを連れていき、時には何週間も家を空けることもあった。モネの唱える野外の写生、外の光の中でのものをみて描くのである。いろいろな場所からみた富士山の姿、鎌倉の海岸、蓮の池などの絵を何枚もかいている。リラがイーゼルと立てるとすぐ、人々がまわりに集まってきた。外国人が珍しいのに加え、女性が絵を描いている、

それにいままで見たこともない絵の具や見たこともない描き方である。印象派の点描は日本画の線を重視する描き方を見慣れた人たちにとっては驚きだったに違いない。

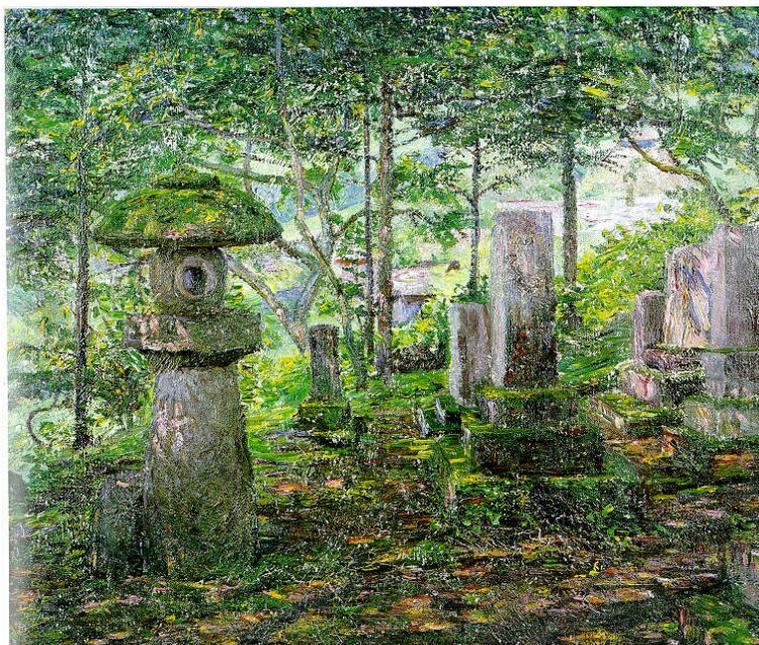
リラはボストンに帰ってからの新聞のインタビューに答えてこう言っている。「日本で私が野外で写生している時、周りにどれだけたくさんの人が集まってきたかを見れば驚くでしょう。一度、私の娘が後ろを振り返って何人いるか数えてみたことがありました。なんと62人もいたのですよ。絵の対象へのアプローチの仕方が彼らのとは違うことに感心したようでした。彼らの絵はもちろん、全く伝統的なものです。でも私が富士山の絵を描くのをみて、“そっくりだ、そっくりだ。”と叫んでいました。

富士山のすっきりした形と輝きに魅せられたたくさんの絵が描かれた。あとで展覧会に出したものだけでも少なくとも35枚はある。紫の山肌や海岸、山頂にかかる雲などが場所を変え、時間を変えて描かれている。鎌倉の海岸では、松林の間から見える海が描かれている。

翌年明治32年9月ごろには鎌倉の近くの大屋によくでかけ、これまでの彼女の作風とはすこし異なる、大胆な形と色の画面いっぱいひろがる蓮の葉があらわれた。

その頃のトーマスの書いた手紙が残っている。「リラはこれまでもまして懸命に描いています。大屋には二度出かけました。汽車でここから西に1時間半午後3時半に発って夜10時に帰ってきます。蓮の花を描くためです。二枚油絵のいいのを仕上げました。最初はうちの男の子を使いに出し、蓮の花を取ってこさせてここで描いてみましたが、しかしやはりリラは自分でそこへ出かけることにしました。行く途中は退屈だし、その町は暑いし、人混みはたいへんでしたが、おもしろかったので持参したもので夕食をすませ帰りは遅くなりました。」

そのほかに、「日本」という題の木々に囲まれたお墓が並ぶ絵がある。(下図。私が数年前初めてリラの絵を画集で目にしたのはこのお墓の絵だった。なにげなく手にとった「アメリカの印象派」という本の中でモネの筆使いを思わせる点描で描かれた、どうみても日本のお墓に見える絵を前にして、びっくりしてしまった。それからリラの絵を調べ始めた。)



人物画も数多く描かれた。人物画は風景画ほど印象派らしい描き方ではなく、むしろ古典的な描き方をとりいれている。日本人をモデルにした作品が多く、ツネもリラのためにイーゼルの前にたたされた。

日本の少女を描いた「みかんを持つ少女」（下図）や日傘をさした女の人がしゃがんで橋の上から池を見ている「日本庭園にて」、訪ねて来た客をお茶でもてなす日本婦人を描いた「訪問」などがある。リラは絶えず娘たちを描いてきた。特に娘たちがまだ小さかった頃室内で遊ぶ姿や読書する姿、フランスに行ってから戸外での光の中の娘たちをよく描いている。日本に来て描いた中に三人の娘たちが室内で演奏している「トリオ（三重奏）」という絵がある。マーガレットがヴァイオリン、エディスがチェロ、アリスがピアノを弾いている。

そのころ麻布に住んでいた家は外観は洋風だったが中は純日本式だった。畳の上に一部敷物をしき靴をはいている。床の間には花が生けられ三人の春らしい色の服が差し込む光を受けている。このような三人の娘たちがそろった絵は数少ない。日本のふんいきと三人の組み合わせが興味深い。ペリー一家がそのころ気軽に開いた「ホーム コンサート」は、やがて東京にすむ外国人のあいだに広まっていった。



リラとパステル画

リラが日本に着いた明治31年に描かれた「着物の少女」というパステル画が残っている。(右下図 90cmX65cm) これは多分日本で描かれたパステル画のうちの最も古いもののひとつではないかと思われる。この絵は三女アリスをモデルにして描かれ、現在アリスの娘リラ・キャボット・レヴィットが所有している。14歳になったばかりのアリスが日本の着物に袖を通し、両手を頭の上にあげて髪を整えようとしている。リラの初期のパステル画のひとつである。

フランスでは当時ドガによるパステル画がたくさん描かれ特に踊り子の連作は有名である。ドガと親しかったアメリカ人のメアリー・カサットも母と子供の絵を数多くパステル画で残している。パリでリラとメアリー・カサットは親交があり、お互いの家を訪ね会っていた。ある日リラはメアリー・カサットの家で白髪の婦人に紹介される。マネの義妹、バーサ・モリソット(ベルト・モリゾ)だった。彼女も印象派の画家で優れた油絵とともに多くのパステル画を残している。マネも彼女を高く評価し自宅に作品を飾っていた。このようなつきあいからリラのパステル画への興味はわいてきたのかもしれない。

リラはパステル画は油絵ほどは描かなかったが、ボストンに帰って描いた「白い帽子のアリス」、「白いベッド ジャケット」や、もう一度フランスへ行ったときパステルの連作で描いた「春の風景」などがある。

明治34年6月、日本を離れる前の最後の一ヶ月をリラは鎌倉の海のそばで過ごした。毎日イーゼルをたてキャンバスに向かった。わずか3年の滞在だったが、日本の印象は強く、一生リラの心に鮮やかに刻みつけられた。



後年、孫娘エリザベス・グルーにあてた手紙には、「あなたがよその国に行くとき、その国の内部に入り込むようにするというのを忘れないで。そしてその国の人々を本当に知って、その人たちの考え、物の見方、望んでいることなど理解するように。私はフランス人に関してはまるで自分が作ったかのように分かっていたし、日本人についてもそこに38年も住んでいたL夫人よりもよほど私の方が知っていたわ。」と書かれている。

このエリザベスや前出のリラ・キャボット・レヴィットの母はリラの三女のアリスである。余談だが、日本を発ってボストンに帰ったアリスは若い外交官ジョセフ・クラーク・グルーと結婚する。1931年、グルーは駐日大使となりアリスは再び30年ぶりに日本の土を踏むのだが、まず最初にしたことは昔の女中ツネさんをさがすことだった。大使夫人となって帰ってきた「アリスちゃん」と再会したツネさんは涙を流して喜んだ。

リラはこのとき亡くなる二年前、83歳だったが娘たち一家が自分の愛した日本に住むのをとてもうれしがっていた。

晩年のリラ

1901年ボストンに帰ったペリー一家だったが4年後またフランスへ旅立った。トーマスはボストンでは図書館の仕事があったがほとんど無給で資産からの利子で生活するのは苦しく、ますますリラの肖像画からの収入をあてにするようになっていた。フランスでの生活費はボストンほどはかからないので暮らすには都合よかった。1905年から1909年まで4年間フランスに住み、夏はまたジベルニイですごした。モネは一家を暖かく迎え、リラは自然の中で制作に打ち込む。

1909年、またいつかフランスに戻るつもりでパリをあとにしたが、ふたたびフランスに帰ることはなかった。

1920年、72歳になっていたリラはボストン アート ギルドから長年の功績を表彰される。一家は依然としてリラの収入に頼っていたので、このころのリラは多くの肖像画を手がけている。一日に4人もの依頼人がやってきて、2時間ずつポーズして休む間もなく描き続けた。13週間に13もの肖像画を仕上げたこともあった。

1922年(74歳) ニューヨークで、1927年(79歳) ワシントンD.Cで個展を開き好評だった。

晩年はニューハンプシャーのハンコックに購入した農場で過ごすことが多くなっていった。自然の美しさのなかに浸り秋の山や冬の雪景色を好んで描いた。夜明けや午後4時頃の色の移り変わりが好きで、特に雪や木々がピンクに染まりそれが日没後深い青にとけ込む時間を愛した。

78歳の年、(1926年) フランスからモネの死の知らせが届く。二年後には54年連れ添った夫トーマスも亡くなりリラは悲しみに暮れた。

1933年、2月28日 リラは亡くなった。その日まで絵筆を握り大きなキャンバスに雪の山を描こうとしていた。85歳だった。

リラの作品は、フランスの Claude Monet Foundation、シカゴの Terra Museum of American Art、ワシントン D.C.の The National Museum of Women in the Arts などに収められている。

参考文献

- Gerdts, W. H., *Lasting Impressions*, Terra Foundation for the Arts, 1992
Martindale, M., *Lilla Cabot Perry*, The National Museum of Women in the Arts, 1990
A Woman's Perspective, The guild of Boston Artists, 2001
Perry, L. C., *Days to Remember*, Santa Fe East Gallery, poetry collection and exhibition guide, 1983
Gerdts, W. H., *Monet's Giverny*, Abbeville Press, 1993
Gerdts, W. H., *American Impressionism*, Abbeville Press, 1984
Walther, I. F., ed., *Impressionism*, Taschen, 1997
Hirshler, E. E., *A Studio of her Own*, MFA Publications, 2001
ジョン・ラファージ、画家東遊録、中央公論美術出版, 1981
モーリス・セリュラス、印象派、白水社, 1992
高階秀爾、日本絵画の近代、青土社, 1996